

市民に開かれた美術館として、 現代美術の普及と ボランティア活動をつなげる取り組み

●財団法人 水戸市芸術振興財団 水戸芸術館 [茨城県水戸市]

<http://www.arttowermito.or.jp/>

財団法人 水戸市芸術振興財団の運営による水戸芸術館は、水戸市制100周年を記念し、平成2年に音楽・演劇・美術の3部門を合わせ持つ複合文化施設として開館した。

水戸芸術館の美術部門にあたる現代美術センター(以下、センター)では、現代美術の紹介を常設展示ではなく企画展の実施をとおして行っている。作者の有名無名を問わず作品展示がなされるとともに、多様化する現代美術への理解を広げるためのさまざまな事業を展開している。

市民参加による さまざまなボランティア活動

センターでは現在、市民と芸術館をつなぐボランティア活動が活発で、その具体的な役割は、来館者への作品紹介を行う「ギャラリートーク」や、展覧会の設営、ワークショップなどを手助けする「プロジェクトボランティア」を中心である。

「ギャラリートーク」とは、20歳台から70歳台までの約20名のボランティアたちが、週末の決まった時間帯に集まり、来館者に対して作品の説明をするとともに、その感想などを来館者と同じ目線で対話し、一緒に現代美術の楽しみ方を探していく取り組みである。

現代美術は、一見分かりづらく思われがちである一方、作品の多様な解釈が成立つ点が魅力である。こうした“新たな芸術”に対する来館者個々の純粋な感想や驚きなどを、「ギャラリートーク」たちが上手に引き出していく。

こうした活動は、例えば、学校との連携により、子どもたちの豊かな表現力や感受性を育むための手段としても生かされており、学校の児童・生徒が来館する際にも「ギャラリートーク」が対応し、少人数のグループに分かれ、子どもたちと対話をしながら作品を鑑賞するしきみが設けられている。

また、さまざまな企画展に応じて募集している「プロジェクトボランティア」では、展覧会の準備や運営、撤収などの活動をとおして、若者を中心とした市民の現代美術に寄せる興味と、ボランティアへの参加意欲を結び付けている。

例えば、水戸市内の商店街や街中などに、多くの美術作品が展示された「カフェ・イン・水戸」展(平成14年、16年の2回開催)では、約200名の「プロジェクトボランティア」たちが作品のテーマごとにチームを編成し、作者の意図にそった屋外展示や、作品・会場管理などを担当した経験がある。



「12人の挑戦—大観から日比野まで」展(平成14年)



市民の出会いと交流の場としての 美術館をめざして

若い世代への現代美術と美術館活動の普及を目的として開催しているイベント「高校生ウィーク」も、センターにおける特徴的な活動となっている。

この取り組みでは、高校生または同年代者を対象として、期間中はギャラリー内にはカフェが開設され、高校生などがボランティアとして運営にかかわることができる。カフェ内では、さまざまなワークショップなども行われ、学校や地域、世代を超えた交流の場となっている。

「ギャラリートーク」や「プロジェクトボランティア」、「高校生ウィーク」実施の意義について、教育プログラムコーディネーターの森山純子さんは「一般市民に対してさまざまななかたちで芸術館とかかわる機会をつくり、新たな価値観の発見や学びを提供することを大切にしています」と述べている。

取り組みの成果として、来館者に対しては現代美術の作品から広がる創造性を感じてもらうとともに、ボランティア参加者自身にとっては多くの人の価値観を受け入れ、共有することである。そしてボランティアが活躍するさまざまなプロジェクトをとおして、地域の活性化をも助長するといった点があげられる。

センターの今後について、教育プログラムコーディネーターの樋口雅子さんは、「子どもたちからお年寄りまで、世代を超えた方々が現代美術の面白さを共有し、多くの市民が出会い、さまざまな交流が生まれる場として、美術館の機能を広げていきたい」と強調する。

水戸芸術館では、現在美術の魅力を提供する企画展の実施とボランティア活動の継続を通じ、広く市民に開かれた美術館をめざしている。



「川俣正 デイリーニュース」展での
ギャラリートーク風景(平成13年)



**ボランティアを含め、
市民が集う拠点としての性格が
“街中の美術館”的機能として
求められています**

樋口雅子さん(左)、森山純子さん(右)

水戸芸術館現代美術センター 教育プログラムコーディネーター

水戸芸術館現代美術センターでは、現在の「ギャラリートーク」の前身として、平成4年に「美術教育ボランティア」を募集しました。当時は、対話形式の作品紹介をボランティアに託す美術館は珍しい存在でしたから、県内にはもとより県外からも意欲的、個性的なメンバーが集まり、選考の結果17名が選ばれました。

特

び」の提供、そして市民交流による地域振興・まちづくりといった視点から関心が高まっています。
今月号では、こうしたボランティア活動の具体的な事例をとおして、その意義や効果などを検証します。

以来、現代美術センターにおいてはボランティアの役割が重要となっており、「プロジェクトボランティア」や「高校生ウィーク」といった活動も含め、市民との関係もより密接なものとなっていました。このようにスタッフ、ボランティア、来館者などの立場を超えて、市民が集い、交流する拠点としての性格が、私たちのような“街中の美術館”に求められる機能だと考えています。

ボランティアにかかわっているさまざまな人の考え方や思いが、私たちの活動をかたちづくり、また、来館者という外からのチェック機能が美術館運営により良い効果をもたらして、最終的には美術館があることによって利用者や地域が豊かになることをめざしています。

今後とも、現代美術の魅力の発信とボランティア活動の継続をとおして、多くの人々が多様な価値観と豊かさを共有する場としての楽しさを提供していきたいと思います。

集 美術館・博物館をめざして より市民に開かれた

高齢者ケアのための回想法と 博物館資源を生かし ボランティア活動につなげる取り組み

●北名古屋市歴史民俗資料館 [愛知県北名古屋市]

<http://www.city.kitanagoya.lg.jp/tanoshimu/minzoku/>

北名古屋市歴史民俗資料館(以下、資料館)は、平成2年に開館。平成5年より昭和時代をテーマとした展示会を開催して資料の収集・保存に取り組んでいる。現在では館全体が昭和30年代の展示物を中心に構成され、別名「昭和日常博物館」と言われている。

こうした展示物は、時に来館者に対して過去の良き記憶や経験などを呼び起こすことがある。資料館では、こうしたメリットを生かして、回想法の実践による高齢者ケアを推進している。

昭和時代の展示と回想法による 高齢者ケアへの取り組み

資料館では、平成11年に「ナツカシイってどんな気持ち－ナツカシイをキーワードに心の中を探る。」と題した企画展を行い、収蔵品と回想法との新たなかかわりを提唱した。

回想法とは、自らの経験や、昔懐かしい道具を教材として、それにかかわる体験を語り合う(回想する)ことにより、高齢者の介護予防、認知症防止、生きがいづくりなどに役立てるものである。

昭和の暮らしぶりを記録する
重要な資料の数々



資料館に展示されている、使い慣れた日用品や居住空間などは、回想法の実践にあたってはうつつけのものである。これらのほか、資料館の近隣にある明治時代から昭和前期の生活様式を残す

「旧加藤家住宅」(国の登録有形文化財)といった資源を、その実践にあたって有効活用している。

この取り組みは、北名古屋市の福祉グループが中心となり高齢者を対象に、介護予防、認知症防止を図ることを目的とした地域ケアの実践「思い出ふれあい事業」の一環として行われている。

回想法スクール実施と “その後”のボランティア活動

平成14年には、資料館の「旧加藤家住宅」内に、北名古屋市の「思い出ふれあい事業」の拠点となる回想法センターが設置された。

木造平屋建ての施設に、昔風の学校教室をイメージした部屋を配した回想法センターは、回想法の効果を高める目的で行われる回想法スクールの実践の場として機能している。

来館者の持つ記憶は、 資料館活動にも生かされています

市橋芳則さん

北名古屋市歴史民俗資料館 学芸員

現代社会は、時の流れが速く、家族や周囲の人も忙しい中で、高齢者の昔話などゆっくりと聞いてくれる人もなく、その機会も少ないのが実情です。

そのような状況にあって、記憶や体験を共有することで自分を受けとめてくれる良き仲間が現われ、楽しく語り合うことができる機会と場があれば、高齢者にとっての日常生活がいきいきしたもの



「昭和日常博物館」として、昭和30年代の店先を再現

回想法スクールは、週1回の8回開催を1クールとして、年間で4回実施され、概ね65歳以上の参加者10名ほどが集い、自分たちが決めたテーマにそつて語り合い、それぞれにとつての“楽しい時間”を過ごしていく。

その一例としては、自己紹介やふるさとの話を皮切りに、遊びの思い出、小学校の思い出、おやつの思い出、お手伝いの思い出などで、関連の道具を交えながら思い思いの記憶を、共通の話題としている。

さらに、回想法スクール終了後には、自主的に、“つながり”的の継続を目的としたOB会「いきいき隊」が結成され、ボランティア活動をとおして、地域とのかかわりを深めている。

「いきいき隊」メンバーは現在、12グループ132名。回想法の普及を支援する一方で、例えば、病院や介護施設などの手芸の指導、ハーモニカ演奏、学校や保育園で子どもたちを対象としたお釜炊きご飯の体験教室、もつつき会といったボランティア活動を開催中である。



回想法スクールではさまざまな記憶を共有

地域との連携で幅広いボランティア活動の 支援をめざす

回想法スクールの実施がもたらす成果について、学芸員の市橋芳則さんは「回想法そのものが、高齢者の健康維持や認知症予防に効果があり、さらに、回想法スクールの経験者が、楽しい時間の共有を通じて仲間づくりを実現し、地域のボランティアとして、いきいきと社会参加する機会を提供することです」と述べている。

資料館では、平成16年度に「モノ語りの博物館講座」を新設し、高齢者の回想をもとに、高齢者自らによる企画、展示演出を実施し、さらにはボランティアとしての参加を促進している。

今後も、例えば「回想法キット」と呼ばれるツールの作成・貸し出しや、「懐かしさ」を体感できるイベントの開催などをとおして、「いきいき隊」や回想法センター、さらには地域のNPOなどとの連携を深めていき、高齢者による幅広いボランティア活動を支援していく考えである。

のになるとを考えます。

私たちが、回想法を実施する意義はそこあります。

また、資料館自体が、「昭和の生活」というキーワードで記憶や体験をたどる場として、非常に多くの人たちにかかわりをもつていただいている。

例えば、昭和の生活ぶりを裏付ける資料を寄贈していただきたり、また、身近な生活品に関して、来館者自らが記憶を語ることで、学芸員の役割を担っていただくケースも見受けられます。時には、私自身が知らないことを、来館者の方々から教えていただくこともあります。

そうした市民の積極的な参加意欲を大切にしながら、今後の資料館活動に生かしていきたいと思っています。

市民参加による 多彩な取り組みが注目される ～博物館のボランティア活動の意義と課題～



いしかわ のぼる
石川 昇さん

独立行政法人 国立科学博物館
広報・サービス部 広報課長

より魅力的な博物館へと成長させるボランティア活動

博物館などの文化施設におけるボランティア活動は、施設・展示と来館者を結び付ける目的のもとで多くの市民が参加し、施設のスタッフといっしょに活動することによって、市民の視点、知識、能力を博物館活動に生かしていくことに、最大の意義がある。

博物館でのボランティア活動の具体例としては、施設の案内・情報提供、来館者を展示室に案内する「ギャラリートーク」や「ガイドツアー」、講演会や子どもを対象とした体験・実験教室などの教育普及活動のサポート、展示会の企画・協力などが考えられる。さらには、調査研究のサポートや、標本の整理、広報活動など、博物館の事業の根幹にかかわる作業まで、ボランティアが多彩な役割を果たし、館の活動自体がさらに拡充される効果をもたらしている。

時には、専門の能力・知識をもったボランティア自らが、独自の企画によって魅力ある実験や観察会を行い、博物館へのリピーターを増やすといった極めて重要な役割も担っている。

博物館ボランティアによる成果はさまざま、来館者にとって、同じ市民としてのボランティアと気軽に交流することで「教え合い」「学び合い」といったコミュニケーション活動が生まれて、この体験が博物館を訪れた満足感につながるのである。

一方、ボランティア参加者にとっては、さまざまな活動を通じて、自らの学習成果を表現することができ、来館者とともに知識や感動を分かち合うことで、社会参加への喜びや達成感を充たすことができる。

さらに、来館者とボランティア、ボランティア同士のふれあいをとおして、人間関係を楽しく、豊かにし、市民交流の「場」として、地域の活性化をもたらすメリットもある。

博物館ボランティアにおける協調・協力の重要性

博物館における市民のボランタリーな活動が始まったのは昭和30年代といわれているが、一般市民への公募によりボランティアが導入されたのは、昭和49年の北九州市立美術館が初めてといわれている。

財団法人日本博物館協会が定期的に実施している「博物館実態調査」によれば、博物館におけるボランティア受け入れ館数と、受け入れの比率も年々上昇しており、個々の博物館の特性を生かし、全国で実に多彩な活動が展開されている。

■ボランティア受け入れ状況

	平成9年調査	平成16年調査
ボランティア受け入れ館数	262	609
ボランティア受け入れ館の比率	14.2%	30.0%

(平成9年、平成16年の博物館調査より抜粋)

博物館ボランティアの実施においては、活動内容の面白さ、企画のユニークさが一つの魅力となる。そして、ボランティア参加者の心構えや実施する博物館側の受け入れ態勢が重要となる。

博物館の主役は、あくまでも来館者と展示物であり、そのためにボランティアは施設の目的や展示の主旨、活動の留意点などをよく理解する必要がある。そして責任と自覚を伴った行動とともに、来館者に対しては謙虚な気持ちで接することが大切である。

また、博物館側として重要なことは、ボランティアに対するオリエンテーションによる、施設・展示に関する予備知識の周知などである。さらには、ボランティアへの敬意、活動意欲を高める配慮も忘れてはならない。



いずれにしても、地域のために有意義な、より良い博物館活動を向上させるためには、ボランティア同士の協調性や、スタッフとボランティアとの協力が不可欠であり、そうした互いの努力が必要であることを強調しておきたい。

地域に根ざした博物館ボランティアを実現するために

市民のために開かれた博物館、多くの人々に愛される博物館を実現するために、ボランティア活動支援者には、博物館とボランティアとのマッチングだけにとどまらず、ボランティアとともに活動を開発し、ボランティアの目標に立って活動のやりがいや悩みを共有する姿勢が大切であると考えている。

さまざまな社会活動においてボランティアの役割が注目されている昨今、博物館等の文化施設の運営においても、その力が十分に発揮されることを期待したい。

独立行政法人 国立科学博物館

東京都台東区上野公園 7-20
TEL. 03-5814-9851 FAX. 03-5814-9898
<http://www.kahaku.go.jp>

国立科学博物館は明治10年に設立され、自然史及び科学技術史研究に関する世界の中核的拠点として、約350万点に及ぶ貴重なコレクションを保管している。年間入館者数は約160万人。現在、上野本館を中心に、調査研究、標本の収集・保管、展示・学習支援などの事業を展開中である。